横芝の碑（その二十八）

〈想い出の門柱〉

昨年末のクリスマスが間近になった或日、何気なく通りかかった旧老人ホーム敷地の前に、ホームのI老人が鋸を持って立っていました。傍には、木の枝をいっぱいに積んだリヤカーが置いてありました。

この老人は、奉仕的というのでしょうか、老人ホーム内外の片付け等を、何時も進んでやってくれる奇篤な人なのです。

「ごくろうさん、大分大がかりですね。少し手伝いましょうか。」そう言って声をかけた私に、「もう終りですよ。クリスマスの飾付けに欲しい、と寮母さんに頼まれたんです。それに、この柳の枝は、余りはびこり過ぎて、道の邪魔にもなっていたので、思いきり伐らせてもらいました。大体こんなに枝に頑張られては、この門が可愛そうですよ、私達はみんな世話になった門ですからね。」と言いながら、Iさんが指差した柳の根元には、旧老人ホームの門柱が、昔のままの姿で建っているのでした。

「何れは取毀されてしまうんでしょうがね……」、懐しそうに歩み寄ったIさんが、両手で抱え込むようにしている門柱を眺めている中に、何故か離れ難い愛着を感じてきました。

昭和三十年、町村合併後の新らしい横芝町では、民生委員の市原利清さん、医師の川島義雄さん（共に故人）等が先立ちになって、老人ホーム建設の話が進められていました。単一町村での運営、しかも他町村の老人受入れも義務付けられること等から、いろいろと問題があり、苦労も多かったようです。そうした中で、市原さんや川島さんの熱意と、町議会及び理事者等、町を挙げての誠意は完全な実を結んで、昭和三十二年四月敷地八五四坪、建物一四〇坪、受入老人数三〇名、初代院長は市原利清さん、ということで、この門柱の後一帯の敷地に横芝町老人ホームが誕生したのです。

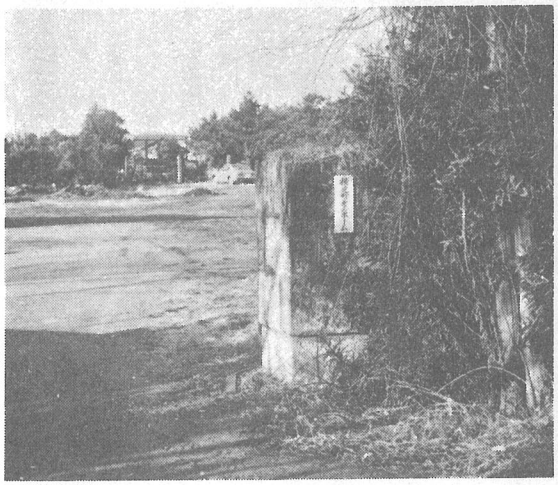
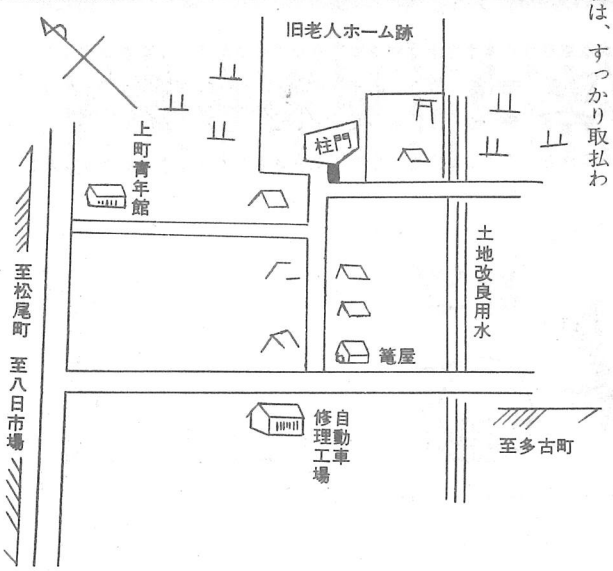
其後、老人福祉法の制定があったり、又入所して来る老人の範囲が、次第に県外にまで及ぶようになってきたこと等から、定員増、居屋増設も行なってきましたが、更に広域行政圏の推進の機運に従って、東金市及び山武郡下町村との話合いが行なわれた結果、昭和四十八年四月、山武郡広域行政組合に業務が移管され、定員の〇〇名の養護老人ホームとなり、坂田池の新らしい建物に転居したのです。

いろいろな都会で、実際に移転が完了したのは、六月になったのですが、それまでの間、実に十七年の月日、朝に晩に、老人達に親しまれてきたのが、この門柱なのです。

或老人はこんなことも言っていました。

「この門は、いま私達に残された只一つの想い出です。逝くなった人達もさっとそうですよ、特に生前「このホームの土になりたいと言っていた人の魂は、或いはこの門柱の上辺りで休んでいるかもしれませんよ」と……

現在老人ホームには、三十三体の物故老人の遺骨が、身寄りの手に渡らずに安置されています。この中には、生前の遺言によるものも有る、というのを聞くにつけ、また見るにつけても、このそれぞれの言葉を、単なる年寄りの追憶として聴き流すには、余りにも心を締めつけられるものがあるのです。

写真は、その門柱で、嵌めこまれた瀬戸の門標には、横芝町老人ホーム、と鮮かに書かれています。後の空地は、元のホーム跡です。既に古い建物は、すっかり取払われてこの門柱と、数本の庭木、それに、荒れ果てた生垣だけが僅かに昔の名残を止めています。柳の枝は、きれいに伐り払われて、その幹は門柱に隠れて見えません。門柱の下に散らばっているのは、I老人が伐り落した柳の枝の一部で、小暗く繁っているのは生垣であった槇です。

（養護老人ホーム小沢所長寄稿）